

## 人間様もたまには怒れ！と イノシシが体で教える野性

豚は人間に飼い慣らされて、すっかり“迫力”を失ったが、そのご先祖のイノシシは、いままなお山野を疾駆してたくましい生き方を見せている。

その象徴ともいえるのが“怒り毛”で、イノシシの肩から頭にかけてボウボウと生えているあの“たてがみ”である。ふだんは、文字通りボウボウと草やぶみたいただが、いったん怒りを発すると針金のように逆立ち、さながらイガグリのようになる。イノシシが野武士にたとえられるのも、この怒り毛あってこそといつてよい。

だが、ご存じの方が少ないだろうが、この怒り毛は、それこそ金属みたいに硬い。そのため、高級な手縫い靴をつくるさい、針代わりに用いられるのである。甲皮と底革を麻糸で縫い合わせるのに、靴を傷めない、もってこいの縫い針として重用されている。

また、この毛を束ねて茶ぼろきとしたり、体毛も、ブラシの原料として大いに役立つている。——ところで、イノシシは山野暮らしの身とあって、ダニなど各種の寄生虫に悩まされる。そのための自衛手段が“ヌタ打ち”、あるいは“グタ打ち”とよばれる“ドロ浴び”で、山奥の湿地など、ぬかるみのあるところを見つけては泥にまみれるのである。そんな場所を“ヌタ場”、“グタ場”といい、イノシシたちはその泥の中にひっくりかえって、害虫や寄生虫

などを泥づけにするのである。

人間界でも、女性たちの間で泥んこ美容なるものが流行中と聞くがイノシシたちは、いちやく大昔からこれをやっていたのだ。なかにはこれを田んぼの中などでやる連中がいて、田んぼがめちゃめちやになり、多くの農家が泣かされたものである。

さて、泥浴びしたイノシシはそれぞれ決まったコースをたどって森に入る。松の木を見つけ、根元から四十センチぐらいのところをまず牙でひっかく。そこからマツヤニがしみ出してくるので、こんどはそこに泥だらけの体をこすりつける。このとき、泥はほとんど乾いたようになっていたため、ボロボロと剥げ落ち、体についたダニなども一緒に払い落とされてしまうのである。

ところが、そのあとにも、さらにマツヤニがつくので、しばらくしてそれが乾くと、それこそ体中の毛がカチカチに固まってしまう。この天然のヨロイは昔のちやちな鉄砲では弾が通らなかつたという。

